

座標: 北緯34度32分21.34秒 東経135度50分28.42秒

ウィキペディア

箸墓古墳

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

箸墓古墳（はしはかこふん、**箸中山古墳**）は、奈良県桜井市箸中にある古墳。形状は前方後円墳。

実際の被葬者は明らかでないが、宮内庁により「**大市墓**（おおいちのはか）」として第7代孝霊天皇皇女の倭迹迹日百襲姫命の墓に治定（じじょう）されている。また周濠が国の史跡に指定されているほか、周濠の一部は「箸中大池」としてため池百選の1つに選定されている。

目次

概要

名の由来

墳形・規模

外表施設・遺物

築造時期

意義

被葬者

調査その他

文化財

国の史跡

脚注

注釈

出典

出典

関連項目

概要

纏向遺跡の箸中に所在する箸中古墳群の盟主的古墳であり、出現期古墳の中でも最古級と考えられている前方後円墳。この古墳を、『魏志』倭人伝が伝える倭国の女王、「卑弥呼」の墓とする（一部の邪馬台国畿内説）説もある。築造年代は3世紀末から4世紀前期とする説もあるが、これは卑弥呼が死亡したとされる3世紀中期との時期にずれがあり、また古墳の規模および様式が魏志倭人伝の記述と異なっている。

しかし、周辺の周壕から出土した土器の考古学的年代決定論により箸墓古墳の築造年代も卑弥呼の没年（248年から遠くない頃）に近い3世紀の中頃から後半とする説もあるものの、近年炭素14年代測定法では50-100年程度古く推定されることが明らかとなっている。墳墓からは種々の特殊埴輪類が出土しており、また周壕の基底部から馬具（木製の輪鏝）が出土していることから、4世紀中期以降の可能性もある。

現在は宮内庁により陵墓として管理されており、研究者や国民の墳丘への自由な立ち入りが禁止されている。倭迹迹日百襲姫命とは、『日本書紀』では崇神天皇の祖父孝元天皇の姉妹である。大市は古墳のある地名。『古事記』では、夜麻登登母母曾毘売（やまととももそびめ）命である。

名の由来

『日本書紀』崇神天皇10年9月の条に、つぎのような説話が載せられている。一般に「三輪山伝説」と呼ばれている。

倭迹迹日百襲姫命（やまとととひももそひめ）、大物主神（おほものぬしのかみ）の妻と為る。然れども其の神常に昼は見えずして、夜のみ来（みた）す。倭迹迹姫命は、夫に語りて曰く、「君常に昼は見えずして、夜のみ来す。分明に其の尊顔を視ること得ず。願わくば暫留まりたまへ。明旦に、仰ぎて美麗しき威儀（みすがた）を勤（み）たてまつらむと欲ふ」といふ。大神対（こた）へて曰（のたま）はく、「言理（ことわり）灼然（いやちこ）なり、吾明旦に汝が櫛笄（くしげ）に入りて居らむ。願はくば吾が形にな驚きましそ」とのたまふ。ここで、倭迹迹姫命は心の中で密かに怪しんだが、明くる朝を待って櫛笄（くしげ）を見れば、まことに美麗な小蛇（こお

この項目に含まれる文字「箸」は、オペレーティングシステムやブラウザなどの環境により表示が異なります。

 箸墓古墳 / 箸中山古墳 	
 墳丘全景（右に前方形、左に後円部）	
所属	纏向古墳群
所在地	奈良県桜井市 箸中
位置	北緯34度32分21.34秒 東経135度50分28.42秒
形状	前方後円墳
規模	墳丘長278m 高さ30m
出土品	特殊器台形埴輪・壺形埴輪
築造時期	3世紀後半
被葬者	（宮内庁治定）倭迹迹日百襲姫命
陵墓	宮内庁治定「大市墓」
史跡	国の史跡「箸墓古墳周濠」
特記事項	全国第11位/奈良県第3位の規模 ^{[1]} 全国最古級の前方後円墳 『日本書紀』崇神天皇紀に記述
地図	 箸墓古墳



倭迹迹日百襲姫命大市墓 拝所

ろち)がいた。その長さ太さは衣紐（きぬひも）ぐらいであった。それに驚いて叫んだ。大神は恥じて、人の形とになって、其の妻に謂りて曰はく「汝、忍びずして吾に羞（はじみ）せつ。吾還りて汝に羞せむ」とのたまふ。よって大空をかけて、御諸山に登ってしまった。ここで倭迹迹姫命仰ぎ見て、悔いて座り込んでしまった。「則ち箸に陰（ほど）を懂（つ）きて墓（かむさ）りましぬ。乃ち大市に葬りまつる。故、時人、其の墓を号けて、箸墓と謂ふ。（所々現代語）

また、築造について日本書紀は記す。

「墓は昼は人が作り、夜は神が作った。（昼は）大坂山の石を運んでつくった。山から墓に至るまで人々が列をなして並び手渡しをして運んだ。時の人は歌った。

大坂に　継ぎ登れる　石むらを　手ごしに越さば　越しかてむかも　」と。

なお、箸が日本に伝来した時期（7世紀か）と神話における説話との間に大きなずれがあるところから、古墳を作成した集団である土師氏の墓、つまり土師墓から箸墓になったという土橋寛の説もある。

墳形・規模

最古級の前方後円墳によくみられるように前方部が途中から撥型（ばちがた）に大きく開く墳形である。測量図の等高線の様子から前方部正面が現状より拡がっていたことが分かる。前方部の先が撥型に開いている他の古墳は、兵庫県揖保川町の養久山（やくやま）1号墳、同県の権現山51号墳、京都府山城町の椿井大塚山古墳、岡山市の浦間茶臼山古墳などがある。ちなみに浦間茶臼山古墳は箸墓古墳の2分の1の相似形といわれ、長さも幅も2分の1であるが前方部の頂の形は横長の長方形と台形の違いがある。

現状での規模は墳長およそ278メートル、後円部は径約150メートル、高さ約30メートルで、前方部は前面幅約130メートル、高さ約16メートルを測る。その体積は約37万立方メートル。周辺地域の調査結果から、本来はもう一回り大きかった可能性もある。

後円部は四段築成で、四段築成の上に小円丘（径約44-46メートル、高さ4メートルの土壇、特殊器台が置かれていたと考えられる）が載ったものと指摘する研究者（近藤義郎等）もある。前方部は側面の段築は明瞭ではないが、前面には4段の段築があるとされる。ちなみに五段築成（四段築成で、後円部に小円丘が載る）は箸墓古墳のみで四段築成（三段築成で、後円部に小円丘が載る）は西殿塚古墳（大和古墳群）、行燈山古墳（柳本古墳群）、渋谷向山古墳（柳本古墳群）、桜井茶臼山古墳（鳥見山古墳群）、メスリ山古墳（鳥見山古墳群）、築山古墳（馬見古墳群）等が考えられ他の天皇陵クラスの古墳は全て三段築成（後円部も前方部も三段築成）とされる。被葬者の格付けを表しているのかも知れない。

奈良県立橿原考古学研究所や桜井市教育委員会の陵墓指定の範囲の外側を発掘した調査により、墳丘の裾に幅10メートルの周濠とさらにその外側に幅15メートル以上の外堤が存在していた可能性がある。巨大な前方後円墳がその最古の時期から周濠を持っていた可能性がある。

外表施設・遺物

前方部先端の北側の墳丘の斜面には、川原石を用いた葺石が存在していることが確認されている。

この時期には埴輪列はまだ存在していないが、宮内庁職員によって宮山型特殊器台・特殊壺、最古の埴輪である都月型円筒埴輪^[注釈 1]などが採集されており、これらが墳丘上に置かれていたことは間違いない。また岡山市付近から運ばれたと推測できる特殊器台・特殊壺が後円部上でのみ認められるのに対して、底部に孔を開けた二重口縁の壺形土師器は前方部上で採集されており、器種によって置く位置が区別されていた可能性が高い。特殊器台や特殊壺などの出土から古墳時代初頭の3世紀後期から4世紀に築造された古墳であると考えられている。

埋葬施設は不明であるが、墳丘の裾から玄武岩の板石が見つかっていることから竪穴式石室が作られていた可能性があるという。この石材は、大阪府柏原市の芝山の石であることが判明している。従って、崇神紀に記す大坂山（二上山）の石ではない。

周濠は前方部と後円部の一部分の発掘調査から、幅10メートル前後の周濠と、幅数10メートル前後の外堤の一部が見つかっている。後円部の東南側の周濠部分では両側に葺き石を積み上げた渡り土手が見つかっている。

築造時期

墳丘形態や出土遺物の内容から白石太一郎らによって最古級の前方後円墳であると指摘されていたが、陵墓指定範囲外の周辺部である箸中大池西側の堤改修工事に先立って、奈良県立橿原考古学研究所が行った事前調査で周濠の底から布留0式（ふるぜろしき）土器が多量に出土した。これの実年代について、奈良県立橿原考古学研究所は炭素14年代測定法により280〜300年（±10〜20年）と推定している。しかし土器は古墳自体から発見されたものではなく、陵墓指定範囲外の周濠の底から発見された土器に付着していた炭化物が3世紀後半のものだとしても、この古墳が発掘された縄向遺跡には縄文時代から古墳時代までの遺跡が存在しているのでそれが箸墓古墳の築造年を代表しているとは言えないし、仮に3世紀後半であったとしても卑弥呼の没年より新しいことになる。さらに魏志倭人伝では牛馬がいなかったと記述されているが、周濠から馬具（木製の輪鍔）が出土していることも矛盾点である。

木製の輪鍔は周濠の基底部に堆積した植物層から、同時期に投棄されたとみられる大量の布留式土器とともに出土。出土状況から投棄後池を攪拌した痕跡もなく築造後すぐに投棄されたと推定される。確認できる最古の鍔は302年と322年に埋葬された鮮卑と東晋の墳墓から出土した騎馬俑の片側のみ。このため鍔が発明されたのは290〜300年頃とされる。漢字で鍔を「金編に登」と表すのは、初期の鍔が金属製で乗馬の際の足がかりとしてのみ使用されたことに由来する。木製鍔は鉄製鍔のあとに登場した。確認される最古の木製輪鍔は朝鮮半島は



国土交通省 国土画像情報（カラー空中写真）(http://w3land.mlit.go.jp/WebGIS/)を基に作成

百済時代初期（4世紀前半）の天安斗井洞の木芯鉄板張輪鍔とされる。小野山節氏が「日本発見の初期の馬具」で木芯鉄板張輪鍔を古式と新式の2種に分類している。これによると箸墓古墳の周濠から出土した輪鍔は下部が欠損してるため確認出来ないが、残っている部分で判断すると

- 柄が細長い。
- 柄の頭が角ばる。など新式の特徴が見受られる。

4世紀前半は中国で鍔が発明された直後であり、この時期の騎馬俑には小さな鉄製と思われる鍔が確認できるが、これらには乗馬の際の足掛けとしての機能しかなかった。朝鮮半島で出土した百済前期（4世紀前半）とされる最古の木製輪鍔は木型に鉄板を貼り馬の操縦に適した機能を持たせるなど劇的な改良が見られる。木製鍔が開発されたと考えられている高句麗周辺の壁画古墳からは5世紀以降にならないと木製鍔が確認されない。鍔が朝鮮半島に伝わった時期を考慮してもこれを4世紀前半とするには疑わしく、百済が中央集権国家になったのは4世紀半ば以降であることから、この木製鍔は4世紀半ば以降とする方が妥当である。さらにこれが日本に伝わった時期を考慮すると箸墓古墳の木製輪鍔は早くても4世紀後半ないし5世紀以降とする方が望ましく、その特徴が後世的であることもこれを裏付けるものとなっている。

研究者の年代観によって造営年代は若干の異同がある。広瀬和雄はその時期を3世紀中期ないし後期^[2]としているが、「魏志倭人伝にしたがうかぎり、箸墓古墳が卑弥呼の墓であることの可能性は低い、というよりは証明しがたい」と述べている^[3]。白石太一郎は3世紀中葉過ぎ^[4]としているが、「3世紀半ばすぎというのは、卑弥呼は亡くなっているが、その後継者である台与の時代である。」とも言っている^[5]。寺沢薫は260〜280年頃^[6]、石野博信は3世紀後半の第4四半紀、西暦280年から290年にかけて^[7]とし、「纏向(まきむく)遺跡。二世紀末に突然あらわれ、四世紀中頃に突然消滅したこの大きな集落は、邪馬台国の有力な候補地として浮かびあがってきた」^[8]としている。

日本最古の前方後円墳などと紹介されるが、前方後円墳としてホケノ山古墳、纏向勝山古墳、纏向矢塚古墳、神門5号墳、神門4号墳、辻畑古墳など多数ある。これらの纏向型といわれる帆立貝形古墳と異なり**箸墓古墳**は方墳の部分が拡大した定型的な前方後円墳となっており、築造時期は3世紀後半以降から4世紀前半までと考えるのが一般的である。

意義

墳丘の全長約280メートル、後円部の高さ約30メートルで自然にできた小山と錯覚するほどの規模、全国各地に墳丘の設計図を共有していると考えられる古墳が点在している点、出土遺物に埴輪の祖形である吉備系の土器が認められる点などそれまでの墳墓とは明らかに一線を画している。また規模、埴輪などは以後の古墳のモデルとなったと考えられ当古墳の築造をもって古墳時代の開始と評価する研究者も多い。

被葬者

宮内庁によって第7代孝靈天皇の皇女、倭迹迹日百襲姫命（やまととひとひもそひめのみこと）の墓として管理されているが、この古墳を卑弥呼の墓とする研究者もいる。その根拠としては、

- この古墳の後円部の直径が『魏志倭人伝』にある卑弥呼の円墳の直径「百余歩」にほぼ一致することとしている。定説では、魏・晋時代の一尺は24.3センチメートル^[9]、一里は1800尺＝300歩であり、魏・晋時代の1里は約435メートル、1歩はほぼ145センチメートルとなり100余歩は約145メートル強となる（日本では、これを長里と呼ぶ説がある）。
- 後円部にある段構造が前方部で消失することから、当初は円墳であり前方部が後世に付け加えられた可能性があること。この点は調査により当初から前方後円墳であったことがわかり否定されている。
- 大規模な古墳の中では、全国でももっとも早い時期に築造されたものであること。

一方これに対する反論もあり、根拠としては、

- 日本では、その旅程記事などから一里約76メートル（これを短里と呼ぶ）とする説も唱えられており、魏志倭人伝で距離表示に短里が用いられているとすれば直径は約30メートルとなる。またこれだけ巨大な前方部が無視されている合理的な説明がつかない。
- もっとも早い蕃造であっても並立王朝説などに対しては全く反論にならない上、早くとも3世紀後半という卑弥呼没年との築造年代のズレも問題がある。
- 殉葬跡が存在せず、箸墓古墳と同時期に築造された古墳は全て有棺有槨であるなど、倭人伝の記述と全く一致していない。

といったものがある。

このような議論があり、意見の一致を見ていない。

白石太一郎は「箸墓古墳が卑弥呼の墓であることの可能性は低い、というよりは証明しがたい。」と述べる^[4]のに対し、石野博信は3世紀後半とすれば台与の墓^[7]、また、箸墓を寿陵と考える寺沢薫は壹与の墓説やミマキイリヒコ（崇神）などの男王の墓説も浮上してこようと評価している^[10]。宝賀寿男は古代氏族研究を通じて古代においても男性優位であった状況を踏まえ、女性陵墓説を退けて実質的な王権設立者である崇神天皇の真陵説を唱えている^[11]

奈良県立橿原考古学研究所自体は築造時期を280〜300年（±10〜20年）と推定しており、卑弥呼の没年とは年代的に矛盾する。また同研究所が箸墓古墳に先行するホケノ山古墳の築造年代について、2008年（平成20年）の発掘調査報告書で、出土遺物から築造年代を3世紀中頃と結論しつつ^{[12][13]}、木榔木材の炭素年代測定結果の幅が4世紀前半をも含む範囲であることを報告しており^[14]、C14炭素年代測定法による推定は100年程度古く出ることが判明したことから、この墓が卑弥呼の墓である可能性は低くなっている。いずれにせよ、現在ではようやく発掘許可がなされたため実質的調査はまだ始まったばかりである。

調査その他

桜井市教育委員会が**2000年**に実施した周辺部の発掘調査によって、周濠内の堆積土から木製の輪鏝（馬具）が発見されている。同時に出土した布留1式土器により**4世紀**のものとされるが、これにより列島内への騎馬文化の流入および東アジアにおける騎馬文化の伝播の理解が従来よりも古く修正されることになった。なお、周濠が機能停止した後に堆積した土層からの出土であることから、古墳本体の築造年代とは直接関わりがない。

2009年5月30日に国立歴史民俗博物館春成秀爾名誉教授は、箸墓古墳の築造年代を西暦**240-260年頃**とする研究成果を報告した^[15]。

ただし、歴博は弥生時代開始をAMS法で測定した結果、これまでの定説より**600年**早い紀元前**10世紀**から始まったと発表し^[16]、箸墓周濠出土の土器でも通説より**20年**ないし数十年ほど古い値が出ている。^[17]
歴博西本豊弘教授らによる**2009年**（平成**21年**）**1月**の報告によると、**紀元前650年**付近と紀元後**100年**頃から**200年**頃に放射性炭素濃度が世界標準と乖離する部分があることがほぼ確実となっており^{[16][18]}、これを補正するために日本独自の炭素年代校正曲線（J-Cal）がまとめられつつある段階で、年代推定には誤差があることに注意する必要がある。

織田氏の統治下では墳丘上にお茶室が設けられていたという。また、後円部南東の側面に測量図で溝が見られるのは、そのふもと近辺に江戸時代、箸中長者の経営する茶店がありその影響とも思われる。主に**伊勢参り**の旅人を相手に飴・甘味が名物として売られていたという。また、周濠に掛かる外堤も少し東から検出されている。

測量図を見て前方部と後円部の境目に斜めについた溝は、進入禁止になる前に村人が使用した道の跡である。

2013年2月20日、日本考古学協会などの要望で初の調査が実現した^[19]。

2018年4月、奈良県立橿原考古学研究所が前方部出土の壺形土器と壺形埴輪**26**点、後円部頂上から出土した葬送儀礼用の土器の破片**54**点を調査した結果、前方部の土器は地元の土であるのに対し、後円部は吉備地方の土の特徴と酷似していることが分かった。このことから吉備地方で製造された完成品を後円部に並べたこと、吉備地方の勢力が大きな力を持っており、箸墓古墳の造営に重要な役割を果たしたことが推測される^{[20][21]}。

文化財

国の史跡

- 箸墓古墳周濠 - 2017年（平成29年）2月9日指定^[22]。

脚注

注釈

- ↑ 白石らによって、**吉備**（現在の岡山〜広島県東部）からもたらされたものとされている。

出典

- ↑ 古墳大きさランキング（日本全国版）（https://www.city.sakai.lg.jp/kanko/rekishi/dkofun/ranking/zenkoku.html）（堺市ホームページ、2018年5月13日更新版）。
- ↑ 広瀬（2003）
- ↑ 第3回 転換期の考古学研究-弥生・古墳時代の畿内を一例として-（https://japanknowledge.com/articles/blogjournal/howtoread/entry.html?entryid=5）広瀬和雄（2007）初出：『歴史地名通信』<月報> 49号（2005年・平凡社）
- ↑ ^{*a*} ^{*b*} 白石（1999）
- ↑ 古墳からみた倭国の形成と展開（日本歴史私の最新講義）白石 太一郎 敬文舎
- ↑ 箸墓古墳周辺の調査：国営農地防災溜池工事に伴う箸墓古墳周辺発掘調査報告書（2002）.橿原考古学研究所
- ↑ ^{*a*} ^{*b*} 石野（2008）
- ↑ シリーズ「遺跡を学ぶ」邪馬台国の候補地・纏向遺跡 石野博信（2008）新泉社
- ↑ 梁方仲（1980年）p540-541「中国歴代度量衡変遷表」
- ↑ 橿考研（2002）
- ↑ 宝賀寿男「卑弥呼の冢（http://wwr2.ucom.ne.jp/hetoyc15/kodaisi/himikotyou/himiko1.htm）」『古樹紀之房間、『季刊/古代史の海』第25号（01/9）、第26号（01/12）』、2001年。
- ↑ 橿原考古学研究所 2008, pp. 289-291.
- ↑ “ホケノ山古墳と箸墓古墳（http://www.kashikoken.jp/museum/yamatonoiseki/kofun/hokenoyama-hashika.html）” （日本語）. 橿原考古学研究所附属博物館. 2019年10月28日閲覧。
- ↑ 奥山誠義「ホケノ山古墳中心埋葬施設から出土した木材の14C年代測定」『ホケノ山古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所、2008年。
- ↑ “箸墓古墳、卑弥呼の生前に築造開始か　歴博が研究発表” （http://web.archive.org/web/20090605093456/http://www.asahi.com/culture/update/0531/OSK200905310039.html）.



ため池百選箸中大池

- ↑ 朝日新聞. (2009年5月31日). オリジナル (http://www.asahi.com/culture/update/0531/OSK200905310039.html)の2009年6月5日時点によるアーカイブ。 2011年11月12日閲覧。
- ↑ ^a^b 西本豊弘 (2009年1月). “炭素年代測定による高精度編年体系の構築” (http://www.rekihaku.ac.jp/research/list/subsidy/pdf/news_letter11.pdf). 2011年11月12日閲覧。
- ↑ “年代変わる?古墳時代 精度高まる土器の測定” (http://web.archive.org/web/20080610001234/http://www.asahi.com/culture/news_culture/TKY200806070135.html). 朝日新聞. (2008年6月7日). オリジナル (http://www.asahi.com/culture/news_culture/TKY200806070135.html)の2008年6月10日時点によるアーカイブ。 2011年11月12日閲覧。
- ↑ “平成16～20年度 文部科学省・科学研究費補助金 学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアー炭素年代測定による高精度編年体系の構築” (http://www.rekihaku.ac.jp/research/list/subsidy/2008/gakujutsu.html). 国立歴史民俗博物館. 2011年11月12日閲覧。
- ↑ “卑弥呼の墓?箸墓古墳 考古学協会など初調査” (http://osaka.yomiuri.co.jp/e-news/20130220-OYO1T00818.htm). *YOMIURI ONLINE* (読売新聞社). (2013年2月20日) 2013年3月5日閲覧。
- ↑ “吉備産土器が出土 砂を分析、ヤマト王権で役割 榎考研” (https://mainichi.jp/articles/20180430/ddn/041/040/004000c). 毎日新聞. (2018年4月30日) 2018年5月17日閲覧。
- ↑ “実は525m…国内最大の古墳 宮内庁ネットで公開” (https://www.asahi.com/articles/ASL4K55J0L4KPTFC00N.html). 朝日新聞. (2018年4月19日) 2018年5月17日閲覧。
- ↑ 平成29年2月9日文部科学省告示第7号。

出典

- 『中国歴代戸口、田地、田賦統計』 1980年、梁方仲著、上海人民出版社、ISBN 7208011761
- 白石太一郎『古墳とヤマト政権』文藝春秋<文春新書>、1999年4月。ISBN 4-166-60036-2
- 寺沢薫『日本の歴史02 王権誕生』講談社、2000年12月。ISBN 4-062-68902-2
- 広瀬和雄『前方後円墳国家』角川書店<角川選書>、2003年7月。ISBN 4-04-703355-3
- 『ホケノ山古墳の研究』榎原考古学研究所、榎原考古学研究所、2008年11月、289-291頁。ISBN 9784902777611。NCID BA89391331 (https://ci.nii.ac.jp/ncid/BA89391331/)。
- 石野博信『邪馬台国の候補地 纏向遺跡』新泉社<シリーズ「遺跡を学ぶ」051>、2008年12月。ISBN 978-4-7877-0931-8

関連項目

- 弥生時代
- 邪馬台国
- 卑弥呼
- 古墳時代
- 前方後円墳
- 纏向遺跡
- 纏向古墳群
- 前方後円墳体制

「https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=箸墓古墳&oldid=75705527」から取得

最終更新 2020年1月10日（金）02:44 （日時は個人設定で未設定ならばUTC）。

テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は利用規約を参照してください。